方向
第三十六号　一九八五年一月十日発行　京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内　方向社

わたしの兵隊手帳（一九）

赤谷明海

〈昭和二十一年二月二日の項につづく〉

○この班長遂に逝く。世話のやけた患者だつた。死ぬ前は少し大人しくなつたが、以前の事もあるので、可愛想とか、気の毒とかの気持は全然起らない。（二、三）〈ひどい班長だったが、妻への土産にと白馬の毛で羽織のひもを編んでいた。いま思うとあわれである。〉

○二月二日は旧正月の元日、景気のよい爆竹の音が聞えて来る。今日は既に節分。内地を想ひ、未だ此処に留つてゐる自分についてあれこれ思ふ。後送の話は立消え、減水期の事とて小型船が廻らねば四月以降まで延びるらしい。（二、四）

○二月七日　体重測定　四二、七〇〇（〈十〉〇、六〇〇）

但し右より略帽、病衣、腹巻、靴下等の重さを差引いたものが正味。

○江漢病棟より真正コレラ患者発生。これではたとへ船の便があつたとしても、当分帰れさうにない。（二、八）

〈以上で漢口第一陸軍病院江漢病棟を去ることになる。この病棟で、廊下の壁に手を添えながらふらつく身を支

え、辿りついた便所では扉の桟を便りに身を起したものである。この時が最悪の状態だったかと思う。それが二十七号の時か三十号の時か定かでないが、三十号の患者が後送で小人数になってからは次第に回復したとの記憶がある。以後は生命の危険を感じた覚えがない。〉

二月十二日、江漢病棟三十号室を出て、本院伝染病棟七病棟四十号室に移る。同室の者六名。相変らず曹長と一緒で、　ノ澤軍曹等は隣の三十九号に入つてしまつた。部屋は小さく、陽がよく当り、居心地は悪くない。(二、一二)〈この病棟の位置ははっきりしないが、平地に平屋数棟が並び、畑もあった。四周を鉄条網が囲っていた〉

○二月十五日　体重測定　四四、五〇〇(〈十〉一、八〇〇)

襦袢、袴下、腹巻、靴下等を差引いた残りが正味。

○二月十五日、新入患者二名。同室者八名となる。新患者の一名は辻義人。面白い邂逅ではある。〈前出。大阪府の人。後死亡〉　隣席の村上孟〈長野県人〉、今日より粥食。昨日又第一報が発せられ、幾分弱つて来た様子。

○二月二十日、突然診断があつて後送者の決定を見、その中に入る事が出来たが、その夜真正コレラ患者発生、忽ちとり止めとなつてしまつた。(二、二一)

○近頃気温頓に上昇、外套の必要もなく、マスクの使用〈結核患者のせいであろう〉が苦しくなつて来た。農園には菜の花が咲き出し、型通りに蝶々が舞つてゐる。内地の四月頃の温さだらう。内地を想へば、帰心実にあはただしいが、船が来なくては話にならない。給養は相変らず悪く、栄養の点が心配。(二、二一)〈掛盒に穴をあけてオロシガネとし、花の咲いた大根をすりおろした。婦長等のあっせんで構内のクローバーを摘んでいため

たが、これは筋立って固すぎた。この話は後に出る。〉

○二月二十二日　体重測定　四五、〇〇〇（〈十〉〇、五〇〇）

近頃食思〈欲〉極めて良好。給養は悪い乍らも、主食は定量摂つてをり、この分ならば相当体重が増えてゐるだらうと思ふのに、事実は案外である。夜不眠症に加へて南京虫の襲撃で、毎日五時間足らずしか眠つてゐない。これが体重増加をさまたげる第一の理由であらう。

○二月二十六日　血沈

自分の血の色彩が他の者に比して極めて鮮明。沈降の速度も最初の一時間に僅か「2」。病棟中最優秀であつたとか。但し、昨日頃より左胸部に鈍痛があつて気分はすぐれない。

○昨夜、如何なる理由か〓曹長の機嫌悪く、例の通り、その当りは自分に対して最も強い。昨夕、中西が残飯桶から飯の塊を拾つて来たので、それを捨てさして、自分の夜の分に残しておいた飯盒の飯を食べさした。その時〓は〈が〉「赤谷、この頃担送患者の飯はそれ程少いのか」と訊いたが、此方は飯の方の分配には係つてゐないので「自分の見たところでは、あれ位なら普通だらう」と答へて置いた。今朝は胸痛の為め、この病棟に来て初めて飯上げに行かなかつた。奥井が飯を分配し終つた時、〓は「検査するから持つて来い」と云ふ。一亘り見てから「赤谷の飯が多いからもつと減らせ」との事。云ひ方にケン〈険〉がある。更に食事終る頃、川島が奥井に「俺の飯を持つて行つて、赤谷と二人で分けて食へ」と云つたところ、横から〓が口を出して「奥井にだけ食はせばいい。赤谷なんか寝てばかりゐて何もしやがらんと……」と。すぐそばでこれを耳にした自分、勿論心平か

でない。何が故にかく自分ばかりが変ににくまれるのか判らないが、平素軽蔑もし、叮重にも扱はない心の奥が、外面の糊塗を裏切つて相手に響くのかもしれない。何にしても斯様に照準されたのでは、此方もおいそれと引込んでゐる訳にもゆかず、昔ながらの闘争意識が蹟を擡げてくる。一方では大人気ないと思ひながら、他方では医やしきれぬ感情の余燼がある。それで今朝は不愉快である。今に見てゐろと目下怒をおさへてゐる。でも思へば、よく人から悪まれ、敬遠される自分ではある。（二、二七）〈次に御幣餅（長野県）等の作り方を記す。省略〉

○一時元気を回復した村上、今日第二報へを〉発せらる。胃が吊下る様に重く、腹が痛み、便が軟いさうであるが、これは以前にもよく言つてゐた事、特に今悪く見えるのは全身の浮腫である。これも一時少くなつてゐたところ、二、三日前から又悪化して来た。片方の目がより小さく見えるまでにはれてゐる。元気ではあるが相当危険状態である。然し何とかしてこの時期を脱して貰ひたい。（二、二七）

○二月二十八日。一昨夜来急に気温下り、降雨雷鳴等があつたが、昨夜は特に寒気酷しく、強風が荒れ狂ひ、今朝になつてみれば、雪が積り、水は凍つてゐた。漢口での冬で、この季節外れの雪や氷が〈は〉初めてのもの。（二、二八）

○コレラ菌蔓延の心配が無くなつたためか、数日来の雨で揚子江の水量が増したためか、又後送の話が持上つて来た。この十一日と十八日との二回に亘つて行はれるとの事。

全く、毎日の生活が自分でもあきれる程内容のないもので、それは既に生活などと云ふ事さへ当はまらない。所謂酔生夢死に終始してゐる。この日頃の日暮へひぐらし〉から足をぬき出したい気は勿論ありながら、積極的に

自ら働き出すだけの気力もなく、只茫然と本能の欲する儘にまかして、外部から転換の条件が来るのを待つてゐるに過ぎない。自分の年令を思ひ、召集以来経過した時日と行動とを思ふとき、限りない焦燥や自己軽蔑、自己嫌悪と云つたものを感じはするが、今の自分には　後送にすべての期待をかけるより外、何の力もない。どうか今度の後送こそ真実で、この無為徒食の日数を出来るだけ少くてすむ様であつてほしいものである。（三、三）

○宗教にしても、その開祖を除いては誰がほんたうな魂を持つてゐようぞ。俳諧にしても、芭蕉の他、幾人の人が魂を持つてゐるか。形だけでも見ることができるのはうれしいことである。人間の仕事に、ほんたうな魂だけのものがどれだけあり得よう。形だけだと見えても、少し寛容な心で見れば、形の中に魂は存外生きてゐることもある。すべてのいいことは、形だけでも保存して置きたい。――吉田絃二郎「木に覚りて」の中「草の花あり」

〈次に民謡六種。省略〉

○もしこの自然から人間の生活をとりのぞいたら、いかに自然は索然たるものであらう。そこにかつて人間が棲み、かつて悩み、悲しみ、戦ひ、人を恋ひ、人を思ひつつ死んだといふ物語をのこすことによつて、いかに自然が貴くせらるるかといふことを、つくづく考へさせられた。（北海道と大和）―吉田絃二郎「青鳩」の中「思惟と孤独」

○・人生に対する不平不満

・社会組織の不合理や欠陥に対する怒り

・人間の冷酷な利己心や偽善に対する憤り

○三月八日　体重測定　四七、〇〇〇（＜十＞二、〇〇〇）
但し病衣襦袢等すべて身につけたまま
○哲学を研究する。或は宗教を、或は文芸を。そして所謂ひとかどの哲学者なり、宗教家なり、文学研究者なりになることは、少し頭のいい人には困難なことではあるまい。即ちこの方面の専門家となり、大学の教授となることはむづかしいことではないであらう。しかし哲学にしろ、文芸にしろ、その味を嚙みしめてほんたうな味に徹することは極めて少数のめぐまれたる人のみにゆるされることである。たいていの研究者は知識の綜合、整頓、系統化までで終つてしまふ。味を嚙みしめるためには知識以上のものが必要である。かれの全我的な懐疑、信仰、心熱、煩悩がなくてはならぬ。生きるか死ぬかの精神的クライマックスに於いてかれは思索しなければならぬ。人生を体験しなければならぬ。哲学、宗教、文芸の研究は、それがただ知識の問題としてのみ取扱はれるかぎりでは、人生について真実なものを与へてはくれない。知識以上の問題、人格的な問題として取り扱はるる時、ほんたうな味が生まれ、わたくし等の生存そのものを根柢的に動かし、色づけ、深くし豊かにする。ー吉田絃二郎「静かなる土」の中「味に徹す」の一節
○「丈草庵の秋」（吉田絃二郎）
丈艸和尚の生活をしたふ。後日再読せん。
○今日は陸軍記念日。今では何の＜下給品支給の＞楽しみもある筈はない。空は曇つて寒い。十日程前まではむしろ暑い位で、南京虫の跳梁に悩まされたが、その後毎日の様に雨が降り、この分では内地よりもはるかに気温

が低い。一日二度の飯盒洗が苦になる程冷い。給食は愈々悪く、一時毎日の様に支給されたパン類へマントウのようなパン〳〵も全然なくなつた。飯は少い。村上に粥を炊いてやらうと、煙草を用ひて飯上げ使役の連中に頼んではみたが、何の効果も上らない。知合の伊丹、寺島等にも、己をみにくく頼み入つても望みは達せられない。それにしても菜葉はよく食つた。夜消灯までの闇を利して、前の畑からぬいてくるものである。生大根もよく嚙つた。かうでもしなければとても腹がもたぬ。身体の具合はいい。痰や咳は殆どなく、胸痛もない。ただ寝汗が相変らず続いてゐる。

冬空の様にどんよりとした天気模様の中で菜の花がよく咲いてゐる。桃も咲いた。看護婦さんが挿してくれた黄色の花は連翹である。梅は何時の間にかしぼんでしまつた。広い空地はまだ冬枯のままではあるが、斯様に春の花達は目覚しく息吹へいぶ〳〵いてゐる。ここで春のさかりに会ひたいとは少しも思はないが、早くかへつて内地の春に逢ひたい心は切ない程である。蓬へよもぎ〳〵ののびぬうちにかへりたい。つくしの頭を擡げるところを見たい。ああうまくゆけばまだ賀名生の梅の盛りにあへるかもしれない。後送の話は大分活潑化して来た。期待するところ愈々大きい。（三、一〇）

夜来庵かぜだより　ー若い日の森田曠平ー　（一、九）　原田憲雄編

へ一九四一（昭和十六）年〳〵『水甕』七月号詠草。

朝な朝な松の梢を仰ぎみて来棲む目白に心足らふも

庭芝にころ伏して仰ぐ赤松の繁葉ごもりに目白ささ鳴く

日に顕ちて松の花粉のほのぼのと流れやまざり南風（みなみ）そよげば

庭松の繁葉の梢（うれ）に目白鳥ねむりひ　さしも花粉流れて

『水甕』八月号詠草。

昼閑（かん）に山より渡る松風は時に枯葉を砂の上にこぼす

砂の反射（てり）障子に白く昼たけて松の花散るこの閑かさや

転寝へころぶ〉して今宵け寒し夏に入りて北山過ぐる時雨多しも

わが庭のうつぎの花は時過ぎて広葉に音し過ぎゆく時雨

八　月　二　十　二　日　　午後消印。はがき。墨書。

拝復　先日は失礼しました、　御親切に四書御知らせ頂き有難う、以前六円位についてゐたので買ひませんでした、寺町で三円余でありましたが、私在来の古版本を買つたので今のところほしくはないのです、色々とすみませんでした、五日は欠席

『水甕』九月号詠草。

甘きものなべて乏しき今の世にこの羊羹や君がたまもの

茶をたてて誰か訪ひ来よ羊羹はかびへ原漢字〉の来ぬ間にうまくし食はむ

湯のたぎへ原漢字〉るに些か間あり思ひ出て南針老師の書もかけてみつ

わが祖父の南針老師に見えたる忘機の日々もすでにいにしへ

切りて来し唐竹蘭はわが床の白磁の瓶に雨ながらさす

九　月　十　日　　午後消印。はがき。墨書。

拝復　研究会は　この頃モデル写生をしてゐますので翌日差支へますから　欠席致します　みな様によろしく。

又一度御来遊下さい　草々

へこのころ、水甕西の研究会は、大塚五郎先生を中心とする「一艸社」（いっそうしゃ）として新たに出発することになり、回覧雑誌『艸』を発行しようとしていた。森田君は、しかし、身体の調子や、本業の絵の方が忙しく、その会合にも出席できないことが多かった。原田の方は、この年の末に繰り上げ卒業ときまっており、論文作製などに忙しく、通信はたがいに減少する〉

十　月　十　九　日　　午後消印。はがき。

前略　「艸」へくさ〉原稿の事　小生　多忙の折から　五日ばかり風邪のため　臥床致しをり　ちよつとしたもの（文）ならば出来てゐますが　絵が出来ません。それで今度は絵の方は　かんべんして頂き度　願上げます。能のスケッチを一枚入れる程度にします　気分あしきため　二三日延引何卒おゆるし下され度候

へこれ以後、翌年二月、原田の入営のため、ほとんど通信はなく、原田が幹部候補生として豊橋陸軍教導学校に入ったその年の六月以後、通信が再開する。それから一九四四へ昭和十九〉年の末に原田が台湾軍に転属するま

での森田君の書簡は、原田編『幻の葡萄』にほとんどすべて収めてある。一九四六年三月、原田は台湾から復員帰国するが、以後はたがいに戦後の生活に追われ、森田君は画業に専念するため京都を去る。年齢からいっても森田君は三十歳をこえる。「若い日」は終るのである。書簡を中心とする限り、ここで稿を閉じてよいわけだが、『水甕』に掲載された森田君の詠草の切抜が手許にのこっているので、転載してこの稿の結びとしよう。〉

『水甕』へ昭和十六年〉十一月号。

秋浅き峡たどり来て山の童（こ）に道を問へども恥ぢて答へず

しだ蔭の水湧く岩に口つけて喉をうるほす胸ぬらしつつ

秋たちて冷たき水の石の間に小蛇ひたりをり動くともせず

護摩壇に日射し翳れば冷々と山の深きに水落る音　岩屋寺

滝壺に行者はをらず落ち水はさ霧となりて杉をぬらせり

『水甕』昭和十七年一月号。

畠より帰りし母にまつはりて子は鼻声にくどくどと言ふ

障子戸に灯りほのけくさしてゐる草屋の奥に赤子泣く声

月待ちて峡に立てれば闇の中を車のきしむ音近づくも

山の冷えはやうやく著し満天に星は忽ち光たち来つ

眼交の道ひとところ明りたり草屋はいまだ戸をささなくに

『水甕』二月号。

わが庭の落葉の上に音（ね）にたちて時雨過ぎゆく籠りてをれば

寒き音（ね）に外の面を時雨過ぎゆけば炭火かきたてわれ一人をり

さびさびと時雨るる空か軒の端にさわぐ雀の声高まりぬ

現身を保（も）ちて堪へゆくことだにもほとほと今は易からなくに

ひとところ山きり開き土[illegible]し吹きとほる風にわが吹かれ立つ

『水甕』三月号。

昼ふけて黒き御廚子に御仏はしづかに御目開きおはすも

刀法峻厳にして御面のかげふかぶかと咲（ゑみ）たたへます

み仏の点睛へママ〉いよよ黒々とあやにかしこし吾に向ひて

御仏の御面拝すとにじりより吾がつく息の音をはばかる

み胸近く珠ささげます御手の線ふくよかにして天上のもの

夢殿の御廚子の前にまをとめの息づき深し掌を合せつつ

『水甕』四月号。

訓練空襲警報解除されたり遮光幕を上ぐれば寒く月澄みてゐぬ

感傷に堕つるにあらねど月みればおのづと浮ぶおもかげのあり

寄付金の受領証書きをれば妹はレモンの香る紅茶いれ来つ
筆置きて紅茶すすりぬ浮べたるレモン一ひら夜半を香にたつ
町内会の雑務に夜は更けゆきて炭火の灰は白くくづれつ

『水甕』五月号。

一心に道を行ぜん心すら或日は灰の如くしらけつ
魚の腸（はら）に毒をしかけて猫を待つ或夜の吾は夜叉にかも似る
文五郎の玉手御前を白日の闇の底ひに幻と見つ　文楽座
人形は妖精のごとしらじらと恋にもだへて生命（いのち）はてにき
滅びたる城をそがひにすがすがと山を墾（ひら）きて先祖（おや）ら住みにき

『水甕』六月号。

遠潮の騒（さわ）だち白く目にたちて春の夕べのうら曇りかも
磯馴へそなれ〉松の太枝勁く海にむかひ夕べさうさうと風はらみたり
風いでし夕べの海の騒立てば雲おしたれて飛ぶ鳥もなし
山ひとつへだてて海は絶え間なき春の潮の夕とよみかも
松山のくろ〈原漢字・黒十幼〉き緑はひんがしに大きくなだり海につきたり

『水甕』七月号。

海ぎはの温泉（ゆ）へゆく道に橋ありて夕潮の香をかなしみ渡る

蔦ひとつ磯に下りて徐ろに羽をととのへぬ風に吹かれつつ

馬蹄打つ音をききつつ海ちかき村落（むら）よぎりをり夕潮の色

山ひとつへだてて海は絶間なき春の潮の夕とよみかも

かげ鈍く真日は西へとうへつゝりつつ海のかげへ原漢字・日十仄ゝりに蔦おびただし

『水甕』九月号。

唐招提寺開山忌に鑑真大和上尊像を拝す

病む妻を心にもちて見渡すや奈良の麦野の豊みのりかも

めしふれど伝灯まさに遂げませる悲しき咲（ゑみ）ぞ泣かざるべしや

眉ねやや寄せたまひたる三昧のみ面自（おのづ）と咲みうかびたり

すめらみこと受戒したまふ天平の昔語りに昼ふけぬらし

『水甕』十一月号。

樫鳥が二羽もつれつつ谷渡る鋭声は長し木魂かへして

樫の葉をたたきつけつつ夕立の足は忽ち向山をこゆ

愛宕嶺はすでにかげりて雨雲は谷ゆ湧きたつ瀬音たかまり

山深く雷雨かしこみ岩の間に身をかがませてしばし冷えゐつ

いまだ人に会はぬやすけさ山ゆくと裸身になりて谷川渡る

『水甕』十二月号。

唐招提寺数日

月澄める庭に立てれば金堂の屋根おもおもとそりてまくらき

月の下び青める扉とざしたり古き木の香の闇に深みぬ

よべ過ぎし時雨に湿りて黒みたる土の香ぞ立る朝ひもじきに

よべ冷えていねし朝げは温き茶粥をすする湯気ふきながら

『水甕』昭和十八年一月号。

目の前に忽ち下りせはしげに飛びかふ鳥はひがらなるらし

登りつつ向山見れば松あをく遠く連りて鞍馬に尽きぬ

空澄みて風はつよけれちぎれ雲の忽ち散りてあとかたもなし

『水甕』四月号。

己を責むる心うすらぐ明け暮れの濁れる眼われは知りをり

わがよみしへろへろ歌にある時は思ひ上りてきほひたちぬつ

あきらめに似たる心の湧く夜らは妻いたはりて早寝せむとす

『水甕』四月号。

竹林に竹きるをぢへ原漢字〉とその子らがはく息しろし雪のみだれに

竹やぶの奥どの径に歩みとめ牡牛（ことひ）の雪をぢはらひをり

竹やぶに竹きり急ぐ男らのかげ黒々し雪かげろへば

『水甕』八月号。

重大をまさに感じてわが友とアッツ島戦況に話題及ばず

部隊長以下意気天を衝くの数語にも病床深く泣くにはばからず

死を視ること帰する如しといふ古語の今ぞ切々胸つきくるを

傷兵ら自決終りて突撃にうつる直前の大きしづけさ

アッツ島の歌を書きつつ幾度か原稿紙の上に落つる泪ぞ

『水甕』十月号。

簡閲点呼すでに終りて夏たけぬひそかに期して書籍整理す

敵艦を撃ち沈めたる報道は朝粥すする時にききゐつ

秋田人吾子（あこ）をかなしと木に彫りし昔ながらの人がたぞこは

夏の夜の深けてを暑き几に置けばこけしにやがて月は及びぬ

『水甕』十一月号。

古寺の裏の軒端にひしひしと露ながら落つる青柿のいろ

秋の蚊の太き追ひゐつ夜を語る明海律師の白衣をぐらく

竹藪は薄明（あかる）みにつつしなひゐて露しんしんと古き碑のあり

『水甕』十二月号。

朝明と共にひきゆく敵なりきよくぞ保ち堪（こた）へて君生きにけり

自決する手榴弾ひとつ残りゐてほのぼの白む空を見しとぞ

『水甕』昭和十九年三月号。

天皇のしろしめ給ふ国土に敵揚陸を現にぞきけ

チアノ伯死刑宣告せられてより数日過ぎぬ既に撃たれしか

エッダ夫人スイスに遁げてその国の湖をぞ見つれあはれその湖

『水甕』五月号。

君思ふ心わく時茶を入れて吾は飲むべし朝も夕べも

君送ると吾立ちしかど足痛み柱にすがり声かけしのみ

あわただへ原漢字〉しく君たち去りぬ握飯二つ食ひ残して置きてゆきにけり

『水甕』六月号。

わが一生（ひとよ）かけて先生と仰ぐべくこの大人をおきてあらじと思ふ

この道を究明（きは）め給ひて先生は浄く寂しくぞいづきましつ

『水甕』八月九月合併号。

雨そそぐ生駒の谷をそがひにし石塔一つ並ぶをぐらく

春浅き平郡八重山に降る雨を見放け立ちをり奥山の上に

谷川のたぎち鳴る音にまぎれずて雹たばしるも滑石の群に

玉　楼　春

―李清照（一八）―

原田憲雄

紅（べに）が匂うてあかい蕾がほころびたよう／みにゆきました南の枝はみんな咲いたかまだだろうかと／どれほどの香を貯えてるのかしらないけれど／かぎりないこころがこもっているのです　／／春めく窓のうちらで痩せおとろえるお坊さま／ふさぎこんで手すりに寄ろうともなさらずに／一杯いかがと招いても来もしない／あしたは風が吹かぬときまったわけでもないのに

双調。五十六字。前・後段おのおの三仄韻。「木蘭花」などの別名がある。李清照のこの作、一本に「紅梅」と題するが原作の趣きをさとらぬ後人のわざであろう。

紅酥肯放瓊苞碎。　Hóngsū kěnfàng qiónghāo suì.

探著南枝開遍未。　Tànzhaó nánzhī kāibiàn wèi

不知暄藉幾多香，　Bùzhī xuānjiè jǐduōxiāng.

但見包藏無限意。　　Dànjiàn bāocáng wúxiànyì.

紅酥は化粧用の顔料で「えんじ」のこと、肯は俗語で「恰」に近い意。採著の著は着と同じで動詞の完了を示す接尾辞。醞藉は人柄のおだやかでおくゆかしいさまをいう語だが、内にたくわえたものが成熟した結果をさす。この前段はいうまでもなく紅梅をうたう。だが後段は白梅をうたうのだ。というのは、この詞、韓愈が八〇六年南地江陵でうたった「杏花」詩を本歌としているからである。その本歌、拙著『韓愈』に詳しく説く。二十句のうち、初めと末の各四句の訳を引いておこう。

下宿はまちの北　人けのない古寺の隣／杏の花が二株　目もさめるような白と紅だ／曲江公園にはいっぱい咲いていたのだがゆけぬとなると／ここのがそれをしのばせる　雨風なんぞ避けてはおれぬ／……／けさここでどうしてふっとなげくのか／幾万という花びらが西に東にふきただよっていたからだ／来年もまたさいて　もっと美しくなることだろう／そのとき杏花道人よ　忘れるな隣の家の翁のことを

さて後段。

道人憔悴春窗底。　　Dàorén qiáocuì chūnchuāngdǐ

悶損闌干愁不倚。　　Mènsǔn lángān chóu bùyǐ.

要來小酌便來休，　　Yàolái xiǎozhuó biàn láixiū,

未必明朝風不起。　　Wèibì míngzhāo fēng bùqǐ

悶損は見慣れないことばだが、わたしの訳でほぼ当っていよう。要来の要は、もとめる、とか、むかえる、と

いうほどの意。後段は、庭の紅梅が、窓の内らの鉢植えの白梅を坊さんに見立てて呼びかけているようでもあり、「おれは研究で忙しい」といっていっしょに梅見をしようともしない夫にからかいかける若い妻のことばのようでもある。いかにもおきゃんな李清照らしい、おもしろい作だ。

ところでこの詞、ことに後段は、いまの中国の学者には理解しにくいと見える。ある人は「道人」を坊さんと解いておきながら作者自身を指すのだろうといい、ある人は、李清照は仏教に帰依した形跡がないのにそんな解釈を下すのは根拠がない、「道」には「料」たぶん何何だろう、という意があってここはそれだ、などとむづかしい論議をやっている。そういう論議を詞の解釈にもちこむ人を「お坊さま」と李清照はからかうのである。わたしなども、その「お坊さま」になりかねない。

一九八四年十二月二十日

いつ何処でーランカーの岸辺で（四）ー

原田憲雄

いつ、何処で、誰が、たれに、何を、いかに。これは、物事を歴史的に考えようとする者が、たえず注意しなければならない項目だ。わたしは若いとき新聞記者をしばらくやったが、わたしの書く記事にはその項目の半分くらいが抜けている、といつもデスクに叱られた。「坊さんだからインド風に時間を超越しているので、それが原田さんの記事のいいところ」そばで見かねた九州大学出・特攻上がりの辻豊君がとりなしてくれたことがある。「新聞はお経じゃねえんだ」とデスクははねかえしたが、お説教はそれでおしまいになった。

たしかにインド人の思考法には中国や日本の時間観を超越したところがあって、それがインドの歴史を考える上での大きな障害になっている。ところが仏教経典は、経・律・論の三蔵の論部は別として、まずどれでも、いつ、何処で、誰が、たれに、何を、いかに説いたかが明記してあって、説時・説処・説主・対向衆…、というふうに検討するのが中国や日本の経典学ではやかましい。その時・処・人物がいわゆる歴史的な実在のものかどうかはとにかくとして。

楞伽経もまたその点では例外ではなく、「ある時、世尊が、ランカーにやってきて…」とはじまるのだ。これは漢訳三本はもとより梵本にもちゃんと明記されている。経典の説処は、おおむね歴史的人物としてのゴータマ・ブッダが実際に説法したと思われる場所の一つが選んである。それはインドの「中国」といわれるガンジス河の上・中流地帯で、ことにマガダ国の主都ラージャグリハ（いまのラージギル）とコーサラ国の主都シュラーヴァスティが選ばれることが多い。ランカーを説処とするのは、楞伽経のほかには、五七〇年にジュニャーナヤシャス（またはジナヤシャス）が訳した『大乗同性経』二巻（あるいは四巻）と六八〇年にディヴァーカラ（またはディヴァーハラ）の訳した『証契大乗経』一巻があるだけで、この二つは同じ経の異訳で内容もほとんどかわらぬ。この経の対向衆、すなわち「たれに」のたれはヴィヴィーシャナ、つまりラーヴァナの弟で、兄にそむきラーマに寝返ってランカーを攻め、ラーヴァナの死後、ラーマによってランカー王にしてもらった夜叉である。

経典の中の「何処で」は、誰が、たれに、何を、いかに、と深くかかわっていて、経の説く教えの内容ときりはなせない。楞伽経の教えは、それではランカーとどのようにかかわっているのか。

いまかりに、四巻本宋訳が原初的なこの経の形だとする。そこにはラーヴァナは出て来ない。それなら、なぜこの経を「ランカーに入る経」と名づけ、その説処をランカーにしなければならなかったのか。それが全く説明がつかない。四巻本宋訳が展開する教えだけなら、ラージャグリハでもシュラーヴァスティでも、また他のどこであってもさしつかえはない。だのになぜ「中国」からかけはなれたランカーを説処にしなければならなかったのか。「請仏品」をこの経にとっての二次的なもの、ないし蛇足、という人は、まずこの問いに答えなければならぬ。だが、誰一人この問いも出さず、もとより答えもない。それがわたしには不思議でならない。

スリランカの仏教徒の間には、ゴータマ・ブッダが生前三回ランカーに来島したという伝えがある。四～五世紀に編集されたといわれる『ディーパヴァンサ』（島王統史・略して島史）、これにもとづき五世紀に編まれたといわれる『マハーヴァンサ』（大王統史・略して大史）によるのであろう。この二つはランカーの編年体の歴史だが、「史的述作というよりむしろ史詩」だといわれる。ゴータマ・ブッダがランカーに行ったということは事実としては考えにくいのだから、それをランカー開国につなぐこの「史書」がそういわれるのは当然だ。しかしそれは今の史観からいうことで、四、五世紀のランカーの、あるいはインドの仏教徒が信じたこととは別次元の問題である。

楞伽経の作者（達）がランカーと関わりの深い人だとすると、その説処をランカーとしたことは自然である。ところで、ゴータマ・ブッダの来島にはじまるランカーの開国史も、「夜叉」と深くかかわっている。『島史』の第一章は「仏陀の夜叉調伏」と題する。その中からいくらかを平松友嗣氏の訳で節録する。表記は適宜改めた。

ランカーは、よき風土に恵まれ、食物も豊かにして、宝鉱を蔵し過去仏の訪れ給ひ、群聖の往来せられたる良野へであった〉。世間主へブッダ〉は仏眼を以て最勝のランカー島を見そなはし給へり。当時ランカーの地は、大林や大畏怖に閉され、はなはだ恐るべき惨忍なる血をむさぼる種々の夜叉やピシャーチャへ食肉鬼〉がことごとく集りゐたりき。「われはその真ただ中に行きて羅刹等を亡ぼし、ピシャーチャ等を駆逐し、人々をして島の支配者たらしめん」とて、ブッダは空中に上り、ここランカーに来、夜叉の集団の真中に立たせ給へり。夜叉の群衆はそをブッダと思はず、他の夜叉とのみ思べり。ブッダは神通力を以て密雲を集め雨を降らし、寒風や曇りを送り、〈次いで〉夏日の如き烈しき熱、夜叉の群衆の中に置かれたり。夜叉等はたちまち東西に南北に上下に依処を求めき。かくてブッダは、悩乱し恐怖せる夜叉等を見そなはし、これらの非人等にいかにして自楽を与へばやと思惟し、他の島ギリ島を想起したまへり。安全に庇護せられ、海に囲繞せられて、食物も豊かに、穀物の芽も多く、気候温和にして、緑の草深き地のある、このヘランカー〉島よりも勝れたる最勝のギリ島を。快き楽しみに充ち、緑繁き涼しさの見るも楽しき園林あり、花咲き果実熟せる樹々あるに、誰として統治者のなきが、空虚にして淋しきことなりき。大海の中、絶えず波の砕くる大洋の水の深みの真中に、連山のそびえて越ゆるに容易ならず、内に住まひを願ふも望まれざりき。〈ブッダ〉「さても邪悪なる羅刹及び夜叉の群よ。我はランカーより程遠からぬこの島、昔のギリ全島を与へん。一切はそこに住み悩みもなく繁殖すべし。このランカーの地は遠劫以来人間の止住せし処なり。これより数多の人々はランカーの地に住すべし」。ゴータマは神通力を以てギリ島を引きよせ、ランカー島に結び合せ「羅刹等よ、希望通りの住処は造られたり。汝等はすべてギリ島に棲

息すべし」。かくてそれを望める夜叉等は、夏に渇したる者らの河に走るが如くギリ島にと走り去れり。すべては入りて再び還らざりしかば、ブッダは島を以前の位置に引き離し給へり。

以上が、ブッダの第一回の来島を語る第一章。第一章は、夜叉を放逐した島にすむ竜王のチューローダラとマホーダラが戦うので、ブッダが再び来島し竜たちを和解させる。ついで篤信の竜王マニアッキカが宝石の堂を建てブッダを上首とするサンガ〈僧衆〉を請待したので、これに応じて第三回目の来島となり、次のような予言をする。過去の仏のクラクッチャンダはここで供養をうけ、ついでカナカムニも供養をうけ、ついでカーシャパも供養をうけ、そこにそれぞれ菩提樹が生じた。わたしもここで供養をうけ、そのあとに菩提樹が生ずるだろう。

これが第二章。そうして第九章に、シーハ〈獅子〉と人との合の子の子孫であるヴィジャヤという暴漢が部下をつれてインドからこの島にやって来ランカーを征服して王となる話。ヴィジャヤたちの子孫がシンハラとよばれ、これが今のスリランカの人口の七割をしめる人たちだ、といわれる。

神話、あるいは神話に類するもの、としかいいようがない。しかしこれに似たものは事実を重んじるという中国の史書『史記』にもあり、わが国の『古事記』にもある。それらはもとより事実ではない。がその神話ないし伝承を作り育てた人たちの心的傾向を反映していることは間違いない。夜叉と人間を差別し、夜叉を絶海の孤島に追放し幽閉することが正義とされるこの話が、ゴータマ・ブッダの正法と結合されることははなはだ奇異である。ここでの正義は『ラーマーヤナ』におけるラーマの正義とほとんど同種だといってよい。

楞伽経の主題が何であるかは、見る人によって違うであろうが、そのうちの一つが「分別の消滅」であると

いう点には異論はあるまい。それなら四巻本宋訳の論理でも『島史』を編集したランカーの僧院の上座仏教への批判とはなりうる。あるいはそのような意味をこめて、この経が「ランカーに入る」と名づけられたのだろうか。もしそうだとするなら、そのゆえよしが、はじめに示される方が経典としては自然である。だが四巻本宋訳にはそれがない。

いまの楞伽経についての通説、すなわち四巻本宋訳が楞伽経の原初的な形だとする説では、この経に「ランカー」の名をかぶせる理由もゆえよしも全くわからない。「請仏品」があるのがこの経の本来の形として、素直に「請仏品第一」から読んでゆけば、なんの疑点も障害もなしに、すらすらとその「無分別」の論理の方に歩み入り、なるほどこれが「ランカーに入る」ことなのか、と納得できように、どうして筋道のつけようもない四巻本宋訳に固執して「ランカー」を無視するのだろうか。

専門の学者の説を無視したり軽視したりするのではない。わたしは学者ではないけれども学問を尊重する気持は失っていない。複雑多岐な今の学問分野では、どのように説明してもらっても素人にはついてゆけぬところがあることも心得ているつもりだ。しかし、いまの問題に限っていえば、素人のわたしの出しているこの単純な問いに専門家が答えを出していない。なぜ楞伽経は「楞伽」経、「ランカーに入る」経と名づけられたのか、という問いに。

とはいっても、わたしがいだいた疑問の答えをさがして歩くこのたどたどしい小さな旅は、先にランカーへの道を開いた法師・先生の学恩に支えられている。合掌礼拝しつつ歩むのである。

一九八四年十二月二十三日